

育土をすすめてから作付ける ～農薬・肥料に頼らないために～



株式会社トラスト 代表 岡田 智明さん

今回は、徳島県勝浦郡勝浦町で自然農法の畑作栽培を行う「株式会社トラスト」の代表岡田智明さんを紹介いたします。

勝浦町は徳島県の南東部に位置し、町のほとんどが西から北へ流れる勝浦川の流域にあります。周りを山に囲まれているため勝浦盆地とも呼ばれ、山裾に開けたみかん畑、平野には田園風景が広がっています。岡田さんの自然農法畑作実施面積は161a（全耕地197a）、ほ場枚数は17枚（全耕地21枚）、その中に有機ハウス35棟（他にクレソン慣行ハウス4棟）があります。専業従事者3人、臨時雇用者7・5人となっています。



カヤ刈り場となる勝浦川



自然農法を志したきっかけと就農のきっかけを教えてください。

父が「子供に良いものを食べさせたい」と考え、私が生まれた昭和50年（1975）から自然農法栽培を始めて43年になります。自然農法に無心で取り組む姿を見て育ち、自然と跡を継いで共に実施するようになりました。

就農当初は販売に苦

戦しましたが、有機JAS制度ができ、有機認証を受けてからは販路を拡大する事ができました。販売先は地元を中心とした少量多品目栽培から、葉菜類主体とした栽培で関東・関西市場に変わりました。現在は、地元スー

パーなどにも卸すようになり、2017年11月に法人化し、株式会社トラストを設立しました。

自然農法栽培についてお尋ねしたいのですが、まずは育土（土づくり）についてお聞かせください。

自然農法開始当初から30年以上、育土は近くの勝浦川流域でとれるカヤを活用した堆

肥を基本としてきました。しかし栽培面積が増え、自家製の力や堆肥だけでは足りなくなつたため、地域の椎茸廃菌床も使うようになりました。

廃菌床は良い状態のものばかりが入手できるわけではなく、腐つたものも持ち込まれます。このような材料で堆肥をつくると、切り返しの際に腐敗臭が体中に染みこみ大変になり↓堆肥場に通いたくない↓切り返し回数が減る↓質の良い堆肥ができないといったように、匂いと堆肥の質の問題などで相当苦労しました。

そこでEMを活用してみたところ消臭効果がすばらしく、切り返しにも楽にでき、堆肥の質も良くなりました。そ

の後土が肥えてきたため、現在は廃菌床の活用を極力減らして、もみ殻を主体とした堆肥に切り替え、腐植の維持を心がけています。

また、栽培面積の拡大に伴い、新しい土地では堆肥を投入後、ソルゴーなどの緑肥を育ててすき込むことを繰り返して育土を進め、有機転換期間が過ぎてから作付けを開始します。毎作ごとにドクターソイル（土壌養分検定器）を活用して土壌分析を行い、微量元素などにも配慮するようにしています。育土が進むに従って病害、虫害対策が以前より楽になり、秀品率も上

がってきました。今後も堆肥と有用微生物を活用して土壌の団粒化を進め、根張りの良い土を維持していきたいと考えています。



運び込んだカヤ(上)と堆肥の切り返し(下)



EM活性液を活用



もみ殻を主体とした堆肥



育土のために育てる緑肥（ソルゴー）



コマツナ栽培



ミズナ栽培



エダマメ栽培



クレソンの養液栽培(左) 無農薬露地栽培(右)
出荷用クレソン(下)



受注生産の春菊など

栽培している品目や品種は
いかがですか？

父の代から受け継いだときは水稲作も含めて少量多品目栽培でした。有機JAS認証を取得し、広域に流通できるようになったことから、ハウスのコマツナ、ミズナを主力とした少量少品目栽培となりました。注文に応じるために水田も畑に変えて、ハウスを増設して葉菜類を育てるようになりました。

その後、リーフレタスが主力となり、高温のため作付けが難しい夏場はエダマメが中心となります。現在は、地元のJAからの依頼もあり、クレソンを手掛けるようになりました。慣行の養液栽培で始めましたが、露地の無農薬栽培もあり、ゆくゆくは有機JAS認証を取りたいと思っています。それ以外にスーパーなどの依頼でホウレンソウ・春菊なども手掛けています。基本的には売り先を確保してから作付けするため、売り先からの依頼で栽培品目や作付面積は変わって



きます。

収量は、リーフレタスで1作2500kg/10aくらいです。年間に4〜5作回していただきますので、年間の出荷実績では35tくらいになります。

具体的な栽培方法を教えてください。

基本的には堆肥や緑肥などを活用した育土を徹底して、栽培を行うだけです。

例えば、現在の主力作目のリーフレタスは、7月前後は気温が高く栽培しにくいために作付けはせず、育土のため、前作の残渣とともに自家製堆肥2t/10aと土壌分析結果に応じたミネラル資材を投入して耕耘します。うね立て後EM活性液を点滴かん水してビニールで被覆し、太陽熱処理で有機物の分解促進と熟成を1か月程度行います。うねは、6m間口のハウスに150cm幅のうねを管理機で4本作ります。

2作目以降も自家製堆肥1t/10a、土壌分析による必要資材を前作の残渣とともにすき混んで全面耕起し、うねを

立て直します。

育苗については、自家製培土（バーミキュライト・赤玉土・日向土・ミミズ糞土Ⅱ2・3・1・1）を作成し、200穴セルトレーに充填して播種し、育苗ハウス内のパイプベンチで育苗します。11〜3月は水稲用育苗器に入れ20℃設定で芽だしを行います。かん水は、セルトレーを給水トレーに入れて底面給水で行っています。育苗期間は20〜40日で、目標の大きさは5葉苗で根が巻いている状態です。

定植は手植えです。ハウス内はマルチなしでチューブによる点滴かん水を行うため、定植直後から収穫直前までかん水が可能です。基本的に追肥はしません。雑草は太陽熱処理と手取りで対応しています。

病虫害対策は透排水性の確保と育土による健全な作物づくりがポイントと考え、質の良い堆肥をつくり、施用後の熟成期間を確保するように努めています。病気は特に気にしていませんが、水田から畑



太陽熱処理（左）と温度計（右）



育苗ハウス内のパイプベンチにのったセルトレー（左）と水稲用育苗器を流した冬の発芽器（右）



に転換して日が浅い畑を中心に冬期に菌核病などの被害が多少出ます。やはり水はけの良い、軟らかい土づくりによる根張りが重要で、栽培中はかん水や水はけに注意しています。

主要害虫のアブラムシは、ミズナ・コマツナの時は洗浄による出荷調整が可能だったため、それほど気になりませんでした。リーフレタスでは洗浄が難しいので問題となります。ハウスを防虫ネットで囲っているため、ハウス内でテントウムシなどの天敵を増やし、農薬を使わなくてもよい環境づくりに努力しています。

販売や地域・消費者との関わりなどはどうですか？

主な出荷先としては、県外の有機農産物取扱業者、コープ自然派、県内のスーパーです。貯蔵がきかない葉菜類の販売が主なので、需要と供給が合わないときがあり、その調整が課題です。生産者のグループ化と自前のカット工場などが必要だと考えています。

卸業者への出荷が中心のため、消費者との直接的な関わりを持ててはいませんが、自然農法技術交流会や有機農業関係者、見学希望者の受け入れは常時行っています。

自然農法を始めて良かった事と将来の目標・抱負を教えてください。

父が自然農法を始めた当時は周りからある意味で変人扱いされていました。現在は父に対して「あなたは先見の明があった」と認めてくれるようになりました。その理由は私が父の跡を継いで農業を続けていますが、周りの農家は跡取りがほとんどいないからです。地域に農業を残すためには、持続的で、地域環境を保全しながら、生活が成り立つ農業を行うことが重要です。有機JAS認証を取り、消費者や流通業者が求める自然農法農産物を主体的に、自信を持って生産していくことが重要だと考えています。

10年前は、面積を増やしたくてもなかなか農地を貸してくれる人がいませんでした。



揃いがよく、肉厚のコマツナを視察する自然農法技術交流会参加者



手植えによる定植後のリーフレタス(上)と収穫前(下)





岡田さん親子

が、今は逆に「使ってほしい」と頼まれるようになり、2019年度は水稲も作ることになりました。現状では取引業者からの需要に対応できていないので、面積、機械共に規模拡大を目指しています。病虫害対策や良質の堆肥づくりなど、個々の技術に磨きをかけ、より良いものをより多く出荷していきたいと考えています。

将来的には、自然農法・有機農業実施者でグループ化して、生産したものが100%出荷できるように自前のカット

ト工場を持てるようにしたいと思っています。ゆくゆくはカット野菜が8割ぐらいの生産体制になればと考えています。

（榎原 健太郎）

岡田さんの栽培のポイント

岡田さんの自然農法栽培の一番の特徴は堆肥と緑肥の活用です。新しく入手できる圃場は水田跡が多いので、サブソイラーで耕盤破碎を行った後に、堆肥を投入してソルゴーなどの緑肥を育てては粉碎・すき込みを続けます。2年間の有機転換期間が過ぎた後もエダマメなどを作付けながら育土を

すすめて、水田から熟畑に変わり、野菜が充分に育つようになってから、ハウスなどを建てて主力の品目をつくるようにしています。

化学肥料や農薬に頼らなくても野菜が充分に育つような農地生態系に育ててから作付けするため、無理なく自然農法栽培ができています。



サブソイラーで耕盤を破碎



堆肥を投入



ソルゴーなどの緑肥を栽培してすき込み、育土をすすめる



十分な育土と排水性を確保してからハウスを設置



エダマメでさらに育土をすすめる



できる限り育土をすすめてから、主力作物の作付けを開始